

天童漫筆

特別

イ 4

3159

B 51

9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7



かより女時と十六夜と暮りては斗ふに及ばんと  
孝ふ事さるはあらん十六夜は三井の徳之只は  
不れとてや二おんゆてその路にちうつし者れ三  
井の徳をよしたる我にやよりおよぶれと又丹桂  
と魚一山に二見ニ世の事の利のあるなりと  
あつれともかせんとあつらふて去んとすあやし  
社をひててもぬしとてさるるもあつてはる菊  
菊五井も斗つてしとて國の初めて争ひあつて  
と勝て投てしとて女時とて色もなく徳の多きを  
あきまぬすてはるぬの山とて國の大本多とて  
者も高くうらし事と思はん又安き思ふも思ふは山  
のふり仁と義と并ふ事なむとて世重とてはる子少と

らるは良知識を失ひて其の命を全くするは社と其の思ふ惑して  
たつものれと死つてその世なり

○世の人陰陽の理を疎く、強て求め強て恨む  
冤家相得ざれど其極計開けず、思ふこと遂  
がれど花咲きて散るゆく道し、是天地の消  
息なり。其内よ少の遅速強弱を不幸  
有り(古今繁野話三卷末)

○自古痴人畏婦墮女畏夫(金瓶梅二十回)

○是ヲ思ヒ、是ヲ思ヒ、復是ヲ思ハバ、見ヨ精思  
ノ得ル星數スラ策ニ布ク、何ノ通ゼザル所アラシ  
(通俗著波女傳第三回)

○其藤原隆富淺野寺長、宅ニ於テ孟子子生於

憂患而死於安樂之章ヲ講ス、幸長曰我石  
田治部ト相惡シ、治部存生中ハ人ニ非議セズ  
身モ亦健固ナリ、今治部死シ、且ツ大御所家  
ノ眷愛ヲ蒙リ、氣緩ク病生ズ、賢人ノ語  
五ウ欺カスト(國史眼所載)

○上田秋成藤篋冊子自序曰「古人云  
文章窮而後工、非窮之能工也、窮則  
門庭冷落、無車塵馬足之騁、事務  
簡約、無簿書酬應之繁、親友斷絕  
無徵逐遊宴之忙、生計羞澁、無求  
田問舍之勞、終日閉門、兀坐其書  
為仇、欲其不工不可得已、不獨此也、

貧賤文勝富、賤文勝貴、吟曹之文勝  
於要津、失路之文勝於登筵、不過  
以本領者有心計間耳、劉聖人拘囚  
演易、窮厄作經、常愛如一、樂天安  
土、又不當一例論也、適有此語、所是  
以暢間情焉畧

○多少箴 不知何人所作其詞曰

少飲酒多饑粥。多茹菜少食肉。  
少開口多閉目。多梳頭少洗浴。  
少羣居多獨宿。多收書少積玉。  
少取名多忍辱。多行善少干祿。  
便宜勿再往。  
**妙事不如無**(富棲拙事)

○繪事五不能。繪畫者不能其情、繪月者不能繪其明、繪花者不能繪其香、繪泉者不能繪其聲、繪人者不能繪其情、然則言語文字固不足以盡道也。(鶴求玉露)

○胡廬山曰、凡事必使可加、酒飲微醉、花看半開。(聽松堂語鏡)

○聞事不喜不驚者可以當大事。(讀書錄)

○讀書百遍、經義自見。(樂城遺言)

○逆史曰、文祿三年大納言豐臣秀俊卒、秀俊襲封于泉和紀三國、驕虎

貫必也、一日遊吉野、臨蜻蛉溪、斷崖逼侍臣投水、侍臣志拉秀俊、俱溺云、無嗣國除。天皇謂之忠ヲ盡リスモ我身ノ為ナリ、斯ル暴君ニ對シテハ侍臣ノ舉、快トイフベシ、三曾西門豹ガ巫女ヲ河ニ投ズルノ談ヲ讀シテ快哉ヲ呼ベリ、今逆史ヲ見テ感深シ矣。秀俊ハ秀吉ノ甥ナリ、

○いととと云フ言葉、最ノ意ナルベシ、正徳五年刊扶桑故吏要略ト云(ル書ニ

讀ル字ヲいとととセリ

又此ノ書ニテ通途ト云ヘル語ヲ見タリ

○古鷹馬匠。唐崎大納言政頼・信州ノ神平

依田豊平・源齋頼、支那ノ孔眞朱光、  
右前太平記二十九卷ニ出ヅ。天皇謂フニ白拍子  
ノ技ハ伊勢、鷹鳥匠ノ道ハ信州ニ傳ヘルカ

○鱧ハ魚名ニアズ、魚ノ用ニテ魚骨ト訓  
ズ、日本ノ俗、刺魚鬣魚ヲ鱧ト誤リ、たひ  
ト訓ズ

○**く**れーのこま何よつともし、着衣袂中  
くろく、たるま、こまのこまノ歌ニ接シバ

日本モ古ハ筒袖ナリニナルベシ  
○破傷風ノ妙薬。溝川ニ居ル小鰻ヲ四

五足ホド、飯粒ト同シク磨リツグシ、紙ニノ  
ベテ傷口ニ張シ、影シク瘧水ヲ吹出シテ即

チ愈ユ

○耳だれノ妙薬。虎耳草(雪ノ下)ノ葉  
ヲシボリテ其汁ヲ耳ニサセバ、重疔ニテモ

忽チ愈ユ  
○蠅ニサレシ時、蠅ノ頭ヲ四ツ五ツ摘ミ  
切り、切口ノ方ヲ傷所ニ付クレハ惡汁ヲ吸出

シテ痛氣忽チニ除リ  
又一方。柿ト麥飯ヲ等分ニネリ雜セテ用

フシハ、齒ノ残りタルヲモ吸出ス。信州ノ人  
野ニ行クニ竹筒ニ溢液ヲ入レテ持チ行キ

蝮ニ噛マレシ時附クルト云フ。天皇謂フニ  
單寧酸ノ殺ナルベシ

○熊膽ヲ瓜ノ食傷ニ用フレハ大毒トナル  
○紫金錠ヲ産後ノ婦人ニ飲マシムレハ忽  
子死ス

○鰻ニ木實ノ酢ヲ忌ム

○猪肉ト蕎麥切一又豚肉ヲ食ヘハ死ス

○しゆんぎくヲ辛しあえニシテ食シ死セ  
ル者アリ

○薄荷トいじが等毒ナリト云フ

○柿ノ蒂ハしやつくりニ効アリ

○世ノ捉コソ不思議ナレ、大晦日ニ生レテ  
モ翌正月元日ハ二歳ナリ

○明末ノ名将戚南塘ハ倭寇ヲ恐レテ紀

効新書ヲ著セリ

類以下十四條睡餘漫筆ノ拔書ニテソレ  
ニ己ノ意モ書キ加ヘタリ。又ごきハ梳ノ事ニ

テ兵器ト書ク(ミトイヘル記事アリ)

○時ニ走り利ヲ逐フハ山人ノ業ナリ。偶大利ヲ  
得ルコトアレトモ、多クハ後ノ大害ヲ招キ、家ヲ  
敗リ身ヲ失フ者多シ (安井息軒)

○其名將某三弦ノ類、總テ小藝ハ世ニ秀テ  
タル名人アレ共、遠大ノ業ニ達スル者ハ絶テ少シ

○物徂徠曰ク、萬古ノ新奇總テ陳腐中  
ニアリ、天竺花ヲ捨テ、別ニ春ヲ為スコト  
能ハスト

○加藤嘉明曰久踏止ハタル武功ハ律義者ニアリト

○昔才坤漢書存了云、史記以風神勝而漢書以矩獲勝

○陳文燭漢書存了云、善詩者不說、善書易者不占

○揚萬里曰、太白詩、僊翁劍客之語、少陵詩、雅士騷人之詞、比之太白則史記、少陵則漢書也

○古今文章章家擅奇鄉音者六家、左氏之文以葩而奇、莊生之文以玄而奇、

屈原之文以幽而奇、我國策之文以

雄而奇、太史公之文以憤而奇、孟堅之文以整而奇、(王維損)

○朝臣、公御侍中高書衣帛而朝、曰朝臣、諸世官校尉將太夫以下亦為朝臣、(蔡崇筮獨斷)

○藏人金曉覽岩之山、捐珠玉五湖之洲、(唐史綱鑑補齊紀註) 二十七丁才

○一ヲ知リテニヲ知ラズ、通鑑五十九、四丁ウ亮曰、君知其一、未知其二云々

○明王紱(九龍山人、友石先生)在京師、月下洞吹簫、吉采興、寫竹石、罔訪其人、贈之、則估客也、客以紅纒綸、餽請再寫

贈之、則估客也、客以紅纒綸、餽請再寫



一枝為配紮前畫裂之還其貌史明  
○不顧義理而苟求勝人。楚辭後語

相註下二見二

○後權執其富者刻公道行而負賂息也。荀卿以相之權階之志後執富之朱子注也  
○荀子成相云、思乃精志之榮、好為  
壹之神以成、精神相反一而不貳為  
聖人

○二世の苦さうらるる事ハ癡子と思ふ心と  
源とす(菴心集)

○貞徳戴恩記、**紹巴**の性質容貌を  
記して曰く、昔の文覚上人の如く心たけく

少毛のいふ事、さうはつらうか  
腹をこいてて貴人、をりけす好  
しめは皆おろけ。眼みよき、眉  
まのく明なるは、目もと鼻大また  
あさやうにあつて、黒み、身輪  
厚く、あつたまたまつ、響ありて、  
こも申さる、思らる、は、は、  
○紹巴三井寺、塾居させ、時貞徳  
愛の和歌、

春わかのうらわよせまてこぼるさ  
春わかはやめてたちうか  
了評、たちを解けてとありし

梅一とて、花は氷る解の後の気味をみん  
りともあつたれば立ちそのぞとさうしてし  
て、さういふうらみさういふは口補の記  
すは、理の定辨をとる

○迷の前の是非、是非共に非なり、夢の  
内の有無、有無ともた無なり。増成表也

○芭蕉を急ぐに、杜るた出ありとあり、  
事、若くは必用よらむ

○櫻寧。久皇三用ケルラ再度見たり、  
淮南子ノ重刊批評ノ序者、臨海櫻寧

子敬所王宗沐。一日本宛に三年報續  
シ、櫻寧系温然、即チ櫻寧病ト号ス

○江戸末期ノ遊観所

梅

本所梅屋敷 糸戸寺高立をり廿四五日目くら

卧龍梅 糸戸町

杉田の梅 糸戸川、立をり廿五日以開

蒲田梅 大森三をり二十日位

糸戸天津境内

難波梅 浅草白地院

竹股の梅 柳場法源寺

常盤の梅 三ノ木南花院

御殿址の梅 増上寺山内

茅野の梅

崇の梅 生込 宗春寺

湯島天神  
赤下川

櫻

上野山王社前

一重、御名桜、三瓦より亭子

同 清水観音堂後

同 山門の前

同 大佛堂前

同 慈眼堂

同 空相院

同 護國院

御名しん丸

同 谷中清水門内寺院

御名しん丸

同 車段

ひん丸

系 櫻

増上る

通 通

院大黒社内

谷 中善昭寺

御名しん丸

根 岸西花院

り

根 津権限

ひん丸

美 良福寺

谷 中七面境内

御名しん丸

桑 園寺

鳴子村 御名しん丸

長 谷寺

麻布

光林寺 麻布

麻布廣尾 本下包

右衛門橋 大久保村

雲井橋 河通化家

駒之助明前 一至彼

文箱橋 市以火ノ下

芳野橋 上野

犬橋 上野 清のきや佐

秋色橋 上野

感應寺 上野

瑞林寺 上野 七十の比

飛鳥山 上野

隅田川

王子権現

根津橋 上野

却殿山 上野 玉川上り色、三玉川上り余

少人五井 上野

廣福寺 上野

子手院 上野

深川元八幡 上野 上野素後寺 常葉寺あり

大井の橋 上野 七十八の比

塩竈 上野 教養院

金王橋 上野

兼平橋 上野

延命桜 赤川系福古

泰山府君 三四

千本桜 浅草

浅黄桜 嵐庭古、長命古

歌仙桜 深川の階

百枝桜 赤中州系古

丸形桜 四つ子系古

母衣桜 西ヶ原

九重桜 赤多明系

十月桜

楊己妃桜 与野西大原系

桃

桃園 白ツ又申路中里。立木より七十日此

大師河原 立木より二十日余

隅田川堤

築比地 善節系

越谷

梨

隅田村

下総八幡

生麥村 川崎

柳

印の柳

陽田川

龍溪柳

麻布長福寺

夫婦柳

西子の柳

見知り柳

古原

牡丹

西ヶ原牡丹

立廻り

深川ハハ

別当園中

上北津村

左内園中

海戸社内

玉風ノ借方ニ植

石蔵

深井ノ植木

立廻り

大庄

月夜

上野穴橋

音羽獲國寺

子ノ手院

藤

海戸天鉢

立廻り

細崎伝七社前

圓光寺

根月夜寺

傳妙寺 あり

鈴本寺 八幡 あり

上野山 五 あり

成り あり あり

<sup>橋</sup> 糖壁

棗堂花

金性寺 柳上、供之山吹寺とあり

蒲田新梅屋敷 中野、お中敷

印のり

野口山金井目黒丸品佛の道

胡枝子 あり

柳 眼寺 柳のめ、お中敷とあり

清水寺 あり

正燈寺 あり

親言奥山 あり

三園福寺 あり

紅葉

海晏寺 あり

東海寺 あり

正灯寺

浅草

日暮里青面寺

上野山中

根津権次山

湯の川弁天

夕日山紅雲寺

目黒明王院

真間弘経寺

高田尾の如來寺

山又寺ノ石方寺

高田成心庵

隅田川新屋神社

高牛花

下谷

东水

石竹

东水極小堂

燕子石

根津社内

三圍社内

蒲田新物屋

木下川薬師

三ツ又、廿日也

牛嶋



白山山下  
堀切 葛菴園

櫻草・紫雲英

戸田原

野新田

尾久の原

深井極木屋 三三より七千五百位

蓮

不忍池 六月廿一日

赤段溜池

池の端妙恩寺

向島白鳥池

橋上寺 赤羽橋内

○名木類

松

御言葉の松 大久保

上意の松 多世戸善心院

相生の松 上野

海子松

頭巾松 城内にあり

首尾の松 浅草新

船松 浅草

手殿の松 柳橋

斑女う衣惣松 向ヶ岡

道灌船繋松 浅草新

鏡の松 浅草新

五石松 駿込

船繋松 浅草新

千代松 浅草新

大友の松 浅草新

光り松 浅草新

絵掛松 浅草新

遊女松

鎮座の松 浅草新

鞍懸松 浅草新

一本松 浅草新

笠松 浅草新

光り松 浅草新

銭惣松 浅草新

道玄物見の松 浅草新

街傘松 浅草新

園座松 浅草新

朝日松 浅草新

加衣掛松 浅草新

火除の松 甚  
 綱が馬撃の松 三田  
 三結の松 二五段  
 雁居の松 白ひ松又腰掛松と云ふ。目黒  
 千布の松 池上寄井  
 静庵の松 北条の松  
 鐘鐺の松 中野の松  
 荒磯の松 陰の松  
 震の松 あり  
 妙寛の松 あり  
 権原の松 あり  
 鑑掛の松 池上

五本松 山名あり  
 五本の松 中川  
 来迎の松 あり  
 龍燈の松 急戸あり  
 水の水の松 清地あり  
 千貫の松 葛原あり  
 大松 駒場  
 朝鮮の松 上野あり  
 御行の松 金杉 大正女子台 枯也  
 富の松 木下川 藤原 晴也

杉

とろ

二本杉

西ヶ京

争の杉

東ヶ京

楊枝杉

ありあはる

四ツ目みだ

枚石

三本杉

浅草

山茶山

生色

三股の山茶

生色

枝銀者

生色

古川葉付銀者

化銀者

生色

銀者人端

浅草福井

影向の槐

浅草一ノ橋

相生の樟

山井吾喜の裏

臂掛椶

とろ

世衣束椶

とろ

印の椶

とろ

如衣の掛椶

とろ

如尾の掛椶

とろ

神木榎 なるゆき  
縁切榎 核榎  
太平榎 急戸  
道灌子栽榎 園分榎  
観音の榎 浅草

片葉の苦楡 浅草馬場 浅草ケル

鈴掛の松 浅草

神宮の松 急戸

廿段竹 足立郡中野村

三股の竹 足立郡芝村、献上モノ

業平竹 中野

影向竹 上野中野

袋前竹 砂村

豊後竹 下野

寒竹 下野

子母の竹 日黒 戸数好

義竹 矢口新田

油根岸の呉竹

右、武江産物志ヨリ轉載

谷中長明寺境内ノ榎

布郷西片所ノ榎

谷中七面改延命院ノ榎

○白奴ノ異名。秦漢ニ云フトコト、白奴、夏ニ獯  
 鬻、殷ニ鬼方、周ニ玁狁、唐ニ突厥、宋ニ  
 契丹、明ニ韃靼ト云フ(十二史略注)  
 ○白樂天不致仕。曰ク、朝露負名利、夕  
 陽憂子孫ト又曰ク、年高須告老、名遂  
 合退身。少時共嗤誚、晚歲多因循ト  
 ○天ニ物ヲ禁ズ、意。白詩魚を歎ず  
詩に曰ク、天各異其心、嘉穀非名祀、牡  
 丹世可食ト  
 ○継子子トシテ情ヲ摠ル、名、因  
の甲亥南のぬき  
 ○心有千載憂、身以一日別白詩

○靜讀古人書、湖釣清閒濱白詩  
 ○富貴亦有苦、苦在心危憂白詩  
有樂、樂在身自由  
 ○人生開口笑、百年却幾回白詩  
 ○白詩逍遙詠、亦莫忘此身亦莫厭此  
身、此身何足戀、萬劫煩惱根、此身何足厭、  
一聚塵空塵、世無亦世厭、此是道  
道人  
 ○常姓及五大姓。萬姓統譜稱張王李  
 趙曰常姓、此猶布利原平後橋三姓  
 也、又按子石手眼加劉謂之五大姓  
○人ハ巧ニシテ偽ラシヨリハ拙クシク實アリニ如ク、卷八

○盗にする子い悪めりて鬼くる者い悪し

(音我)

○赤穂義士仇討予件。元禄十四年三月十四日、吉良侯邸の刃傷ありて十九日は城明けし、二十四日付け赤穂義士侯邸のある赤穂の藩に隠れ去る事あり。其書翰の文西片、十四日人もあやぶるも居れり。とあり。あやぶるはむさくするを指し、其意なり。

○音声之辨 説文ニ音ハ声也生於心有節於外 謂之音ハ宮商角徵羽声也金石

絲竹匏土革木ハ音也ト。字彙ニ実ニ而精者曰声ト。朴ニ而浮者曰聲音ト。毛詩序ニ声成文ト。謂之ヲ音ト。礼記月令ニ疏ニ聲ハ出ラ曰声ト。雜比ニ曰音トアリ

○鴨緑江曲

一蒙古旅蒲鉾馬車は揺らゆつて行く。千里のありや曠野をヨクシヨク宿の娘がよアリや唐言多末は明日ハ又夕暮の草枕、千ヨクシヨク  
二忍は多し。ゲシキスカシの面影追ふて月の沙漠とアリや眺めつ、ヨクシヨク、駒子止めてよアリや。武夫が、明日ハ又ギリヤ

リシヤ新日記、千ヨリ

三佛(西の白土帝一世ナホレオン、セントハ  
十のアリヤ病床でヨイヨ、千軍万馬のよ  
アリヤ夢子を見てよ、醒めりや又セビ

○平家物語の心者。旭山文生(病  
本盤千血録も曰く、相國寺の瑞陰  
が日付録卷六、若君長と、あつもの  
あやめ物語十巻、あやめ、あやめ播  
州あり、あやめ佛と、あやめ、あやめ  
言曲、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
又曰く、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ

平家物語の心者は徳記の心者、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ

○平家物語の心者は徳記の心者、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
七巻あり。新録、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
高寺記、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
紀行、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
三帝、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ

○舞房の太刀。義経記、忠信自害の條  
あやめ、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
の人、あやめに、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ  
のたち、あやめ、あやめ、あやめ、あやめ



安祿山ト云  
フ山アリ、  
廣輿記ニ  
出ツ

○けくくんのまじり。義経死卷之三  
唐那王鞍馬出に倭朝に  
くんのまじりとして夕べの光の  
星をりしことあり

○諺曰、書三寫魚成魯、虛成虎(抱朴  
子内篇卷之四三十五丁九)

○五石。抱朴子曰、五石者丹砂雄黃白礬  
曾青慈石也。大辭典作丹砂雄黃白礬。

石層青磁石

○八犬傳、八房ハ搜神記(卷之三)ノ盤瓠  
房王ノ首ヲ獲テ還ル事ヨリ出デ、南柯夢  
ノ本稿ハ次條ノ武王老樹ノ精ヲ退

治スル事ヲ基トセルナリ

○後三年ノ役、武衛ノ家人置賜曰、  
所ヲ用ミ、通セシマシ、漢後録卷三ニ出ツ

○梁山伯と云、小女、人念恩、隨あり、  
女子、義女、嫁、梁山伯ト云、梁山伯ト

祝英、甚と云、少時、り、曰く、  
年、ま、ま、ま、梁山伯、祝英、甚、の、女子、な

る、  
令、  
通、

其、  
の、

其、  
の、

○隋劉炫左畫圖右畫方目視耳聽  
口言(東見記)

○川原の録一時新人等為朝のたす人  
五州埋歎何日了ふみ抛却竟殘春  
元年年悔あめ心之隆象山之と復む

○呼小玉手段。五祖演禪師示禪意詩云  
一段風光畫不成洞房深處迹愁情  
頻呼小玉元世事唯要檀郎認得聲  
福亦謂之、、、、、

○王仁將事于学文ハ鐘繇ノ書ナリ  
○張果瓢中より駒と出ず帝ハ印月江

録に見ゆのこ

○四河入海。大忌朝花遺芳。江西天馬

王津末。瑞溪脞説。萬里天下白。白部

○馬が養。續日本紀。其字合。同。禱。

○史。鐵ニ儒書ヲ改メテ内典、佛書ヲ卻  
ツテ外典トイヘリ

○王安石ノ善行。五荆公ノ吳夫人一妾  
ヲ買ウラ荊公進ハ荊公コレヲ見テ問テ  
曰ク何者ノ子ゾト。女子白ク妾カ夫ハ軍  
ノ大將ノ部部タリ米運失舟ヲ。故ニ家貧  
尽ク没シテ猶不足シテ妾ヲ賣リテ以テ  
コレニ償フト。公慨然ト歎シテ曰ク夫人

錢幾何ニシテカ汝ラ得タルト、曰リ九十萬ナ  
リト、公其夫ヲ呼ビテ返シテ夫婦タラシム  
ルコト知ノ如ク盡シ錢ヲ以テ是ヲ典フト  
ナリ。人安石ヲ悪行ノ人トス、之ヲ以テ見  
ルニ然ラズ(多刻故子要語卷五)  
○御所の五郎た異傳。當我物語卷九  
ニ曰ク一爰ハ五郎たを寺寮の住し仕は  
る、事あり、元は系の者なりが、山  
信一と十六の御匠の歌を討ち、其系  
叶はて在國より下り、一條の次より忠教と頼  
みより一に忠教の歌を討ちて討ち取ら  
てぬ、此の君よりなりトバ、突竟の荒島

乘の滝の者、七十五人が力を持ちけり  
云々

○機心一動則物離其真、嘗聞東萊如  
祖而海菓不生、合浦貧珠而瑛蚌  
遠移、以近代方古、糲米不生未足  
為異、(大藏一覽集後貧積聚割  
不復生之割注)

○釈迦佛、初名悉達多、漢言頌吉  
○周、蘇由、漢、傳毅、吳、闕澤、成道記  
注見二、大藏一覽集一、三二  
○人情。永嘉大師云、所願教勿人情、有  
疑不決直須爭、不是山僧道人我修行恐

斷常坑

○堯不能化丹朱，周公不能訓管蔡

○愚人秉相見一切法，法性隨其秉相心念

世明也，如寒谷千年堅冰，未嘗作水也。大慈一覽一，六十一

○胡太集曰：吾不知書，吾行兵，惟有三事

不殺人、不虐人、婦女不禁人，虛舍

○楊守陳曰：國可滅，史不可滅

○方孝孺曰：死即死，詔不可忤

○張悅曰：我且自疑，人誰信我

○人民之多，國之由，官吏之縱欲也，官吏

之縱欲者，由天上之不純心，俟也。白香山

○救荒如救焚，惟速為佳。原海錄

○漆器不止，五金為之，金又不至，又玉為之。  
（補遺之之之）

○世厚賞而人不怨，悉所世也

○重外輕內，學者吝之通患。續讀書錄

○三成人虎，十夫操椎，眾口所移，毋翼而飛。莊

○君子之過也，猶日月之蝕，何害於明，小人之可

也，猶狗之晝吠，鵠之夜見，何益於善。秦族刊

○凡用兵，改戰之卒，在卒一民，苟卿

○明其為賊，敵乃可服

○夫天亦有所分，予之齒者，去其角，傳

其翼者，兩其足。是所受大者，不得取

小也 董仲舒

○為存政去雖小必存、為亡政去雖大必亡  
兵略刊

○物盛必有非常之變 劉向

○有非常之變然後乃有非常之謀 耿育

○法愈密則奸愈多、刑愈嚴則怨愈眾、

先王知民之不可得也、故等之以訪親、知民

之不可威也、故之以禮樂 (元邱嘉詒)

○後醍醐天皇の寵妃三位殿の鳥と云ふ

は安祿の牛將公原の女よりして准右と云ふ

○梟首。五雜俎九卷、二十二丁ウ曰、古

以午日賜梟首、又標其首以木、故標

賊首謂之梟首

○五雜俎曰、鶻嘗集於鷓擊之鳥也、然

鶻取小鳥以煖足、且則從之、此鳥東行則

是日不東往擊物、西南北亦然、蓋其義也、

集之擊物、遇懷胎者輒放不殺、蓋其

仁也、至雁鳥則不然、亦不嗜矣、故古人以

鵞使吐蒼雁鳥也

又曰、謝豹其也、以羞死、見人則以足覆

面、如羞狀、是與謝豹聲則死、故謂

杜鵑亦曰謝豹

○狼煙。又曰、狼糞煙直上、故烽火用

之

○謂唐詩人名。五雜俎卷十三、十三丁曰、  
明金陵唐詩慕道煉丹云々

○黒甜瑣語、爵為蛤と題して曰く、西岳老人  
の物語、雀入海中為蛤と云は、末秋の候なり  
或年越ぬの海濱を九月の初め駿馬は  
跨りて通りしに、時々木牌の下なりし  
か、晴れくると天を氣候、晦冥なりけり  
馬追ふ老叟の云ふは、爵の蛤と云ふ  
る時、口かゝる事も、ゆきせば、  
ありて果して、東のの方空、年風と、  
逢の海上、雲の捲入、  
後、空も、清和、けり、  
後、空も、清和、けり、

つらつらと云ん

○津村藍川の譚海、曰く、房總の海邊  
へ出て見れば、秋の末南の如く、丸くか  
たまりし、潮の乘りて、  
流れ来る、海邊、若くとき、見れば、皆  
赤蜻蛉の如く、ありし、  
ハ、飛ひ、  
り、  
ん、  
まへり

○莊子釣を垂る。昭明太子が陶淵明集  
序に、莊周垂釣於濠、伯成躬耕於

野とあり

○活急脚。謝肇淛塵餘曰ク南樂民張真常為陰司勾事俗謂之、

○塵餘序曰、山海僻而僻、其失也罔。齊諧聞而肆、其失也談。夷堅述而秘、其失也証。

○塵餘は恠と述せるものなり、中に死て曰く、有名医将入蜀、見負薪者猛汗、於河中浴、医曰此人必死、随而救之、其人入店中、取大蒜細切、热麵澆之、食之、汗出如雨、医曰、留下人且知

葉天汝富貴乎、遂不入蜀

日本ニ同日ノ談アリ、我古老ニ聞ク、岩代ニ本松ニ崎人アリ、一日路傍ノ人家ニ暑クテ困ム、馬子アリ、嗅フテ前ヲ過グ、崎人曰ク馬子死シテ再ビ此ノ前ヲ通ルヲ得サラント、夕陽ニ及ンテ馬子又嗅ラテ教フテ返リ過グ、崎人恠ンテ問フ、馬子曰ク我先ニ俄ニ味噌汁ヲ飲シ人家ニ就イテ之ヲ得吞ソリト、崎人曰クソレ血カラマシタバ、遂ニ死スベカリト、崎人ハ吾声ニ由リテ其ノ死ヲ知レルナリ、然ルニ味噌汁能ク蘇生セシメタルナリ

○塵餘曰嘉靖乙卯、胡鎮撫賢統兵禦  
寇至臨山少憩樹下、見屠兒將椎一牛  
一犢尚遠乳、將利刀御至車溝中以  
蹄踏沒泥中、屠兒適索不獲、胡詰  
其故、竟殺牛、次日胡沒于傳  
○甲子、以行の原本、信濃杉本より出  
て、奈良井に遷り、後江戸に交易して  
又伊勢の御師向町の寺より珍花あり  
(七部大慶)

○七部、六の日は朝鮮の石よりすくまの白  
ひろ中の石は陽氣和してうすきなりたる  
か如きをにわいといふとあり (大慶)

○李後主は顔真卿の書を以て筆並足の田  
舎漢と評せり

米芾は歐陽詢を新瘡の病人顔色  
憔悴、筆動辛苦すと云り

○益軒の南遊紀の巻下、曰く、古市村西  
琳寺是本邦寺院の初めなり、徳義  
給目が創立、向來寺是なりと云

○園防の室積。菱屋平七、筑紫紀行に曰り  
「此の西なる廣く遠く峨眉山善賢寺と  
て、善賢菩薩子安置せる寺あり、日本  
また一所の古寺なり」とりよ。寺の庭に  
性空上人の石碑あり、性空は播磨の



書の山の関是の歩人有り、上人著書  
此を道り終り時、善賢菩薩は  
女のおもひて上人の歌れ成す玉ひ  
る上へそ徳堅固のあけりて  
内心動き終りて、是の時節  
在りて仰りて見えりて終り  
そつと扱し傳へるる善徳有り。此  
寺の縁説は、此の。此の撰集  
お中の固邦の善徳の善事は、此の  
説りて、今も有り。

○物必遇主。鞍耕録曰、松江善照寺の  
首刀鏝胡忽見、倚上有小片、荷葉舒

卷不已、人拾置懐中、去、胡曰、三日汝  
何物但欲見之、以決所疑、及示乃  
至元鈔三十文。又同郡夏長僕、嘗  
見小花、抱盤旋、道在、行人捉、荷  
葉袖生、頗訝、其所以、則至元鈔貳拾  
文、右二事、絶お繋、所三十文、二十文  
直、微末、年。若女待主、今、三、懐、金  
蓄、穀、殺、信、息、計、高、解、子、以、利、為、念  
者、於、以、寧、了、不、可、疑、也、哉  
○鞍耕録、題、并、珠、曰、人、欲、娶、妻、而、未  
得、之、尋、何、不、負、井、已、而、料、理  
家、子、謂、之、捲、塵、填、井、男、婚、女、婚



く取りて、殆ど自家を棄て、而も自ら無きら

如し ○古今著述系、十洲抄と同事、實甚

だ多し、その引用するもの、かれと同じ

く、今も若物屋、江崎町、古多、終、不とな

る、く、その他、買記、紀、ある、る、練、あ

まの、書、更、り、記、多、り、し

○十洲抄の、他、者、六波羅、二、萬、左、門

入道、有り、と、り、し

○至悲、よ、文、無、く、至、哀、の、待、を、し

○康熙帝、一、教、上、一、縣、對

日月、燈、江、海、油、風、雷、鼓、板、

至悲二漢  
毛無シ

天地、一、大、戲、場、堯、舜、且、湯、武

未、操、芥、丑、澤、古、今、未、許、多、脚、色

○山谷、把、筆、ヲ、論、ジ、ラ、妙、在、第、四、指、ト、云

へり、苦、緊、ナ、ク、又、ラ、知、ル、ベ、シ

○西行の、歌、ニ、首

は、あ、ら、い、ふ、物、を、思、々、を、て、身、を、く、く、と、し

我、み、あ、り、け、り

つ、た、も、も、な、ら、う、あ、ま、い、と、し、世、の、中、に

物、を、お、り、た、を、あ、ま、い、と、し、が

○逢橋、須下馬、有路、莫行、船、は、若

まの、伊豆、日記、に、て、り、し

○待客能斯 二朱盡 注之白ク一生九十九子  
 ○自出 詩 日月章 曰 日居月諸  
 出自東方 (三章) 四章 曰 東方自出  
 ● 蘭養法。花壇 綱目 曰 田螺生 其  
 殼 共 三日 碎 之 大豆 漿 汁 を 等 分 合  
 せ 四 五 日 程 置 之 腐 り ぬ 時 殼 を 去 り  
 土 の ぬ せ 極 め べ し。 黒 不 く は 悪 し 又  
 赤 土 も 白 ぬ せ ぬ 砂 を 多 く 入 り ぬ せ 合  
 せ ぬ 土 の 極 め べ し。 糞 類 は 悪 し  
 風 呂 の 水 を 折 ぐ 灌 ぎ ぬ せ ぬ。 蘭 は 井  
 水 を 忌 ぬ ぬ 羣 芳 譜 見 ぬ。 常  
 日 陰 ぬ 置 ぬ ぬ。 月 極 め ぬ

て ぬ ぬ。 盆 の 底 ぬ ぬ や り が 山 の 黄 土  
 を 粗 く 碎 ぎ て 入 ば 水 が ぬ ぬ ぬ ぬ  
 ぬ ぬ。 然 れ ぬ ぬ 霖 雨 の 節 ぬ ぬ ぬ ぬ  
 ぬ ぬ。 冬 は 土 病 ぬ ぬ ぬ ぬ。 花 鏡  
 曰 養 花 法 訣 云 春 不 出 夏 不 日 秋  
 不 乾 冬 不 溼 と  
 天 意 禱。 春 不 出 ぬ ぬ 春 も 日 ぬ ぬ ぬ 意  
 あり、 冬 溼 ぬ ぬ ぬ ぬ 絶 對 ぬ 水 ぬ ぬ ぬ  
 ガ ス 意 あり。 秋 不 乾 ぬ ぬ 春 夏 ぬ 水 ぬ  
 ヤ リ テ モ ヤ ラ ス ト モ 善 キ 意 あり  
 ○ 魚 ト 云 フ 獸 あり。 詩 小 雅 采 芣 曰 象 珩  
 魚 服 豈 不 日 戒。 注 曰 魚 獸 名 似 猪 東

海者之、其皮背上斑文腹下純青、可  
为弓韃矢服也

○誰知鳥之雌雄。詩小雅正月章二山ツ

○戰之競之如臨深淵如履薄冰。詩小雅

少是章二山ツ

○上天之載無声無臭。詩大雅文王章三

○殷鑒不远在夏后之世。詩大雅蕩

三章二山ツ

○德輶如毛民鮮克舉之。詩大雅丞

民章二出ツ

○一度、手を下ーたふへは再び手を

下ーて心けなひ。再び手を下さな

い為めりけ、その部分を充ふ

心行くげり、描かぬべからず、

(ある河路通勢之語)

○石龜眼二血附キテ地陥ルニ説

述異記曰、和州歷陽淪為湖、昔有書生

遇一老媪、媪得之厚、生謂媪曰、此縣門石

龜眼血也、此地当陷為湖、媪數往視之、門

吏問媪、媪具答之、吏以朱點、龜眼、媪見

遂走上北山、顧城遂陷焉、今湖中有明

府魚、奴魚、婢魚

廣輿記江南庐州府巢湖之條曰、

巢湖合肥世傳江水暴漲溝有巨魚萬



齧同繫

アそごしやしのおやぢらからうすうすうとて  
 おろささせさやとせくとりよ哩福あ  
 リ、多し越は柏崎遊女をの景なり、齧  
 者乃の海り而手を一文字も用きけむ向  
 きの懐新こもせし、心ひら多し情を  
 よの鏡き法し袖を一てよし  
 ○韓非子外儲說左上第三十曰、客有為  
 齊王畫者、齊王問曰、畫孰最難者曰  
 犬馬難、孰易者曰、鬼魅最易、夫犬馬  
 人所知也、且暮齧於前、不可類之、故  
 難、鬼神無形者、不齧於前、故易之也  
 ○ウウ二曰、夫嬰兒相戲也、以塵為飯、以

塗為羹、美、以木為葢、然至日晚必歸饒者、  
 塵飯塗羹、美、可以戲而不可食也、夫福上  
 古之傳、頌辯而不慙、實道先王仁義  
 而不能正國者、此亦可以戲而不可以為治也  
 夫慕仁義而弱亂者、三晉也、不慕而治強  
 者、秦也、然而秦強而未帝者、治未畢也  
 ○ウウ三曰、鄭縣人賣豚、人問其價、曰、道  
 遠日暮、安暇語汝  
 ○ウ申子曰、有欲見人解之、卜世ノ詐偽  
 師、有欲ノ者、物色之テ其、邪術ヲ行フ  
 如シ  
 ○猶玉卮之無當、語出韓非子外儲說

右上。蓋堂豁公之言

○月の山の端、花の禁路、管の影、時々の提灯、雪の川べりなど、徳分村方てもちらり、拜むらゝのてごさしあす

鏡姫作局かぐの靈

○韓非子曰法立而有難、權其難而事成、則立之。事成而有害、權其害而功多、則為之。世之難之法、世之害之功、天下

世有也。の説、百十五

○竹取物語大伴、大納言、言、船又舞

て白楫取の申すことごとく、言高き山とまたのめ、云々

○かつ奴、竹取、蘇映姫てふ大盗人の也

つがとく、後あり

○盡瘁、國事。詩小雅北山、章、或燕之

居息、或盡瘁、事國。注曰瘁、病也

○丁丁音、章。待兔、置、章、極之、丁丁

注曰音、章

○鐵硯未穿。五代、桑維翰、下第、乃鑄

一鐵硯、硯誓、志人、勸改業、翰曰、ハ、ハ、穿

則改業

○玉面能書、云、由家、以風力、氣、歸、曰、共、曰、大

具、是、方、謂、名、手、年、致、曰、風、共、君、古、曰、力、生、動

曰、氣、合、畜、曰、韻、作、画、祇、是、個、理



骨法之下  
五端可學  
必在生知  
宋郭若愚  
固不可少  
不可復不  
到

○畫荆云楊叔雅曰夫觀畫之法見短勿詆更求其長見巧勿譽及尋其平

○畫六法氣韻生動骨法用筆應物寫形隨類傳彩經營位置傳模

彩字南齊謝赫之言  
○畫六要氣運筆力格制俱充變

異合理彩繪者澤去來自然師學捨短宋劉者醇之言

○畫六長廣鹵求筆僻淡求才細巧求力狂怪求理血墨求潔平

畫求長論者未知  
○畫三病枝刻結郭若虛之言

藝平也

○畫十二忌布置拍忽遠近不分

山無氣脈水無源流境無通暢

路無出入石只一面樹少四枝人物佷俚樓閣錯雜灑淡失宜

點深與法宋饒自然之言  
○畫四品逸神妙能百夏文彥之言

○祐善が浮世繪好色一代男卷之七未社

○王子安春游曰客念紛世極春深倍成行今朝花柳下不覺毫年光

○國朝畫徵錄云昔山谷好比艷詞多師以為口業當墮泥穉地獄

○明仇英清馬相昇(字聖治)清王武(字

無倪)等好作秘戲圖(謂知火)

○明和以之時原雲層曰我幼與子

○中院通多未學子韻人韻世之道 藝苑

者曰則有七品短冊幅厚凡緣冠

○板扇燕園叢話疑畫際不破則在

○芥舟畫編卷之一下片二曰江以南

前代可入神若大率產之大江以南

若河朝雄傑氣聚非不足林人心目

○又曰樹石本世定形落筆便定

○又曰師承偏執守門風或俗尚相沿

因循宿習

○又曰大庭用墨渾融山樵用墨洒

灑雲林用墨縹紗仲真用墨淋

○主山學為一幅之山居中

○當山家樹一幅在近而大者

謂之當家樹 (卷二十八)

○郭若虛曰吳(道子)筆其勢圓轉亦象

矣曹(仲達)筆其力猶墨亦懸亦時人

言吳帶以帶衣出水以為編卷二

言吳帶以帶衣出水以為編卷二



二七 勝儿、岡崎也氏也

○土佐光信ノ清水寺縁起中ノ鹿ヲ見ルニ鹿ニ似タリ

○名物刀 稲葉江 福子勤右衛門尉

○リ 數珠丸 日蓮上人所持 銘恒次

○ッ 増紙 一尺六寸位 左馬廐後京國吉作 鎌倉時代

○笑 少々 坊口九尾一ノ芳辰 流探候、流精一、畫屋、穂積重遠ノ赤岩一角ノ墓、野口米三郎ノ付

マサキノゾ

○淺井了意ノ別号。芳賀氏ノ日本人

名辭典ニ字ノ子石 靜孫、如保子、松雲、又瓢水子と号すトアリ、平凡社ノ新撰大人

名辭典ニ瓢水子、松雲等ノ号ガアリトノ記ナレ、圖書解題ニ芳賀氏ト同クアリ

伊豫物語抄海ノ跋ニ記シタ羊岐齋ノ号ハ何レモ無ク、又圖書解題ニ抄海ヲ撰

海トシラレ

○多姓ノ人。富山箕山ハ笠原トモ多本トモ云ヘリ

○牡丹之賛。巧咲倩兮靜麗無亦素以為絢洞夜片葉 右吳漫明畫





卷三 本野原不二 餘風夜

○伊豆日記 下卷 四十八・九 田子ヨリ

○漫藤文草 卷一、二、三、二

○信濃奇勝錄 卷四、三、四 諸所湖ノ不二

○芙蓉奇可觀

○芙蓉又奇

○山玉真影

海名記 下、二、二  
同供文選大詠解 二、下、四丁 文山画

千春

○筑波山

吾妻のつと 卷下 十三ウ、十四 東野

山水奇観 東海 三十ウ、三十一才 旭江

名山回譜 卷下 父晁

利根川回志 卷四、五、六

○伊豆伊呂尾崎

山水奇観 東海 三十一 旭江

伊豆日記 下卷 四十八・九 相陽村江

千春

○吉野山

名山圖譜卷下

能家奇人談

吉野山獨象内

巖春壑園可菊

六冊

和州若野山勝景圖

以原益軒

一帖

西國幸三所名所圖會

六、四十二、三

半山

大和名所圖會

○天の橋立

山水奇觀

筑紫紀行卷十

○久米島の橋

又水内ノ橋

信濃奇勝録

山水奇觀

東山



○那智の滝

名山四譜

文鬼

西國世三の名山所四會

然野名勝四會

芙蓉

○華嚴の滝

日光山志

文鬼

○廣沢の池

○江州琵琶湖磯崎村

川俣其邊大江原十井草の跡二丁

○嵐山

○江州沖の嶋・狹野

旧伊文邊大江原二下・二三丁

○香山  
名山圖譜  
筑此系紀行

○本曾の棧  
涼子みくさ 古卷  
信濃奇勝録

俳諧辞典  
二海寺者朱  
点 市角  
康工文

○芭蕉堂秋仙圖 作者  
百蓮 蘇志門人 後白 飛冲 守勝  
二形 市角 龍白 柳平 東甫  
勝美 越中 康工 平島 必生 画禪  
落花仙 寄陽白井 重威 師玄 松  
鳴法橋仙流画 渡邊 寄潮画 如清  
金成 如軒画 太虚真人 鳴 湖東十  
里 孫維 曾孫 曾孫 曾孫 曾孫  
之前州 硯海 席溪 齋園 田白 駒守  
孫府 夢多 且写 南陽 奥津 輕岐 溪  
画 凉風画 監二画  
○續松 カルタと訓す 松 花全 旧次 印の

出版物として其角附合白續松と云ふ  
このあり

○黄茅提・擔石潭ノ故事。和漢珍  
書多ク卷三ニ出ツ

○八丈傳の大山道節大塚と云ふ火定の事  
は慶長見聞集卷之十に津田大塚  
と云ふ行人火定の事を取り入れたる  
事あり

○八牧利直氣隆。山木トモ矢杉トモ  
あり。慶長見聞集卷之十産頭城言  
片言志ノ條ニ見ユ。

○茶音八音。同都切音塗、苦菜也

ト

夕。ジユ。  
ジヤ。サノヤ  
シヨ。ユ。コ  
蓮ハ芙蓉  
ノ實  
荷ハ芙蓉  
ノ莖  
蓮花ハ芙  
蓉

茶櫃之茶今之茶也。僭也、借也、猶徒也。  
神名、宅加切音他、通舒、音舒。鋤  
加切音闊。倉大切音紫。余遮切音邪。  
高居切音書。羊諸切音余。後五切音戸  
○蓮。北人以蓮為荷、芙蓉之實也、即  
謂房也。

○荷。爾雅秋草一、荷ハ芙蓉、註、別名  
芙蓉、江南人呼以荷、陳風有蒲與荷箋

芙蓉之莖也  
芙蓉也

○芙蓉。雜駢集芙蓉以為裳、註、芙蓉蓮  
花也。韻會木芙蓉、一名拒霜花、一名木蓮



○木筆。妙沢ノ不動、杉花堂ノ書、  
 高野ノ春深ノ書、華山ノ觀音ノ書、  
 ○有田一清(李右工門)ノ旭日  
 ○鳥羽覺猷ノ印



後書誤裝  
 卷二

○飛鳥ハすて頭を結ひて足を履べ、  
 足を結ひて足を履べ、  
 ○常のハズハ尾をあげて持以臆す  
 了大は尾を股前に入す  
 以上二件並工ノ注意スベキコトナリ  
 ○東江源辨之書、安永三年井上金

我が恒史稿格ノ序ヲ書セル大字ニシ  
 テ而モ善シ

●安永九年河揚子鷹ト著シテ四書類函  
 ラ編輯セルモノハ心學者石田勘平ノ四世  
 上河洪水其ノ人ナリ京都住

○常陸國山田村ノ温泉能ク腰痛脚氣  
 ノ諸疾ヲ治セル一帯陸紀行ニ記セリ

○古今俳諧明題集。富曆十三年九  
 月刊吸露庵徳是著板。古今とある  
 とは多く徳是当時徳國の俳士の句、殆  
 二月並神を徳是ノ選とは男は女  
 もののみなり。徳是不名の者も孔方足





秋

音のせい水あらしは水もどか  
 水隠し鉄の音やかきつぎも  
 いちりりや何を種とて  
 何坤の鏡よりかきつぎも  
 方使しつぎて裸のあつさ  
 新まつて髪は髪のあるち  
 中しこちや豊粟に裸は年す  
 仲りこちやとどろくと  
 はみら馬の氣出す清水が  
 昼も夜も日陰のあかど  
 夕影や月影のあかど  
 具羊

谷こよとねの寺ありまの  
 山寺の常備もささげ  
 庭葉やまのまひ  
 庭葉やまのまひ  
 同腹の取まり粟の  
 又花のあしは  
 飛んてまの  
 迷ひるよは  
 冬風や花のへちま

心を  
 思ふ

江夫 一鼠 涼傘 理帆 志中 乙路 里楓 六柿 花明 冬牛 李北 鳥林



有名ナ句テ  
コレカ愚句ニ

此ノ石川柳

二三枚綴見て晴く時面川 也  
 其の音ありたてこく水か 鐘  
 山姥の口をひらてや一時面 杜江  
 木殺風のばこりありり海の音 言水  
 こからしれ砂の尻手海の上 眠石  
 唇で卍子かすわあこもり 涼侘  
 突起怒と叫ぶ約束や火所 王才  
 指の節をさらしてめずす火所 古笠  
 手の文煙を互う入せる火所 涼洲  
 河豚汁や一採りして煮出 兔士  
 捨てる水は後海やあらう 西羊  
 蕎麦州やアゲ只直なるのつく 雨夕

火所 俗  
火桶トスベシ

涼侘うして  
よくその句を採  
んぶとめり  
ら而の端を  
印の音とした  
愚ハ愚ガ

こくくあう火所のるをさきり 涼侘  
 談いとんくと敲くや雪れり 去来  
 胆死んで片枝まき雪の松 涼兔  
 産捨る林着ささりたす夕朝の雪 貝掛  
 魚枝よ水の鱗や薄く存り 柳四  
 點滴のあらくやこし強くこり 几山  
 を菊や藤のさる印の音 芭蕉  
 雪折をひいて行や空念佛 買明  
 弟香のりや何をさすすくす(印)一氣  
 弟香のりや何をさすすくす(印)一氣 路



五兩  
五雨  
誤マシ  
日本、翻  
刻書、數  
多アリ

石似陰印等、芝如封禪トアリ  
○劉尹子に云、智ある者は忘れ、工ある  
ものは後を忘るるは宜敷、名と利とを  
欲するものは、志の方を後せられ、身を  
後せらる。希々の世司の用と世司の諷  
と多しして、安んずるゆえなり。  
○大田道灌著。云はる、我宿草は教  
訓的の字多く祀して、且つ心成や義更  
か會合して義経や義仲の軍法の善  
悪を評せし子多し行、子物  
道灌の云ふやうなもの多し然れども  
又蘇は是利刻のものらしきもあ

○五兩。候風之羽、即統也、楚人謂之五兩。  
庚子山詩、五雨開船頭。然レニ平凡社、大  
辭典解者曰ク、多しが十羽、二羽つて一  
であるの事。五伍の意、温庭筠の送漢文  
詩、白蘋風起樓船暮、江燕雙々五兩斜、  
と。能く強解曲存せんモノカナ  
○内免を見透さる。國の者は教に對  
してつむむ腹ちに、隱する者はあをむ  
きたに、向ふばかり見するものなり、故に怯者  
は内免を見透さる白鳥も白く見ゆる  
より、白鳥白むと云ふ後さるありあり  
平凡社大辭典、内免を見透さるの解

〇剛藤の解きいさるめ々真の其の  
 〇養生及卯、組練、群の出る。其の  
 組練山下り出つた如くに、元来は  
 上總の徳来の里に伝ひ、組練  
 山と想ひて、そきき  
 〇徳士佛仙が子の日庵のまゝ出る。  
 加賀の山松の伝へて後其まを引き  
 移りし、その子の日庵と云り  
 〇山猫・海常。冥又温泉黒甜瓊  
 糖の出づ。野老山女  
 〇はまや。駿馬といふ

〇雀の核。〇里甜瓊糖卷一七丁ラ  
 〇秋田六郷村の農氏一春、四回花の撰  
 を看る事、同書同卷十丁又出づ  
 〇林上置林・屋下架屋。毛稜水遠子  
 便達有餘、真巧未足、若比其父、則林上  
 置林。隋法倫筆、神妙、密方之厥元  
 〇屋下架屋。續ある  
 〇写生・没骨図。黄筌父子画花、  
 妙在賦色、用筆極細、殆不見墨迹、  
 且、輕色染成、謂之写生。  
 〇江戶、餘、以筆、畫之、殊、其、年、三、田、君、施、  
 丹粉、神氣、迫、之、別、有、生、三、里、袋

惡其軋已言其粗俗不入格嚴之熙  
之子乃効請黃格更不用墨筆直以  
彩色圖之謂之沒骨圖筆不復能  
疵瑕遂得畫院品然其筆韻皆  
不及熙遠甚

事文類聚前集

○畫牛雁法。有翁戴松鬪牛者以錦  
裏繫系肘自隨出甚客觀旁有牧豕里  
曰鬪牛力在前尾入而股間今豕鬪而  
尾掉何也黃終畫飛雁頭足比而展  
人曰飛鳥縮頭則展足縮足則展  
頭無而展若驗之信然仇池筆記  
○博記。漢師帝幸江東亡書三篋

〇〇〇

語問美勝名惟張安世識之具述其  
子收高帝曰畫以板校世所遺失

○五月畫下。應奉子文別一四

○李中甫小像狀杜子文別一三（聖學  
隨堂上一七）

○草書才危言。李泰伯袁州學記中曰  
、、、、、者折首而不悔之李泰伯

美乎觀之

○晚年著書。劉器之云孔子年六十  
八歲乃始刪詩定書繫周易此老於  
只教之智却了一生苦求畫星時學  
潤以美流之深矣改之速化始可為

解字

考之法，古者考書，多在晚年，蓋為

此也。

○入室操戈。鄭玄對任中何休好

以羊學，遂其以羊學，墨守。左

氏言育，教以木，廢疾，去乃乃

受，言之子，鐵音育起，廢疾，休見

子，歎曰：原成入吾室操戈，以

伐我子。

○說若稽古三萬言。秦延君記堯

典篇目兩字之說，十餘年之

視若終古三萬言。植譚新編

○世之謂人君子學經以操聖人之

心，考史以驗時子，之變（朱元海述

陽知學苑志記）

○辭勝事則賦（揚子）

○禹貢書法。、、、、貴疏數至者雖小

必記，三施勞者雖大亦略。此正、、、、

也（書卷二十白記）

○伯夷叔齊，名字。姓墨夷，夷，名允，字

公信。齊，名智，字公達。夷，卜齊，六謚，十

○游，曰本，人十。袁了凡綱鑑補首

卷，載スル卜口，資治合編綱鑑總論

曰，東夷，西戎，南蠻，北狄，自古有之，

自生於諸馮東夷之人也。卜

東夷ノ下倭子ト註スルヲ見シバ東夷即チ  
日牟ヲ指セリ、而シテ其ノ下文ニ舜、諸馮  
ニ生ル東夷之人也ト云クヲ以テ見シバ、何等  
カ信ズベキノ傳説ナド存スルヤ、明ナリ  
○魏ノ劉曄曰ク、夫釣者中大魚則從而隨  
之須可制而後牽則無不得也云々  
○李杜。東漢桓帝之代、杜密素共李  
膺名行相次、時人謂之李杜。盛唐  
時杜甫以詩共李白等名、後人謂  
之李杜  
○高山曰、皓ノ本名。東園公ハ唐東、  
綺里季ハ吳寧、角里先生ハ夏國術、

黃公ハ崔黃

○月氏 音肉支

○漢(武帝) 詞臣。莊助、朱買臣、  
吾丘壽王、司馬相如、枚舉、終軍、  
東方朔等

○十干。甲闕逢、乙旃蒙、丙柔兆、丁疆圉  
戊著雍、己屠維、庚上章、辛重光

壬玄默 癸昭陽

○十二支。子因敦、丑赤奮若、寅攝  
提格、卯單闕、辰執徐、巳大荒落  
午敦艸、未協合、申涒灘、酉作噩  
戌闍茂、亥大淵獻

○柳本入唐書唐土より後りし發歌  
 拾遺和歌集別の部、もろろに  
 て柳本入唐

あまのさぶらひのりけ使ふいつのま  
 奈、良の部、こもづてやうも

○馬琴々老年、代筆者玉照後堂霜路。  
 新島玉石童子訓、天保十三年五月八日  
 稿了玉照は書を和路代稿ト署セシ  
 原稿を見たり代稿は口授代筆ノ  
 意ナリトシ

○宋張叔夜、字秘仲

○虚言を少フと云ふ。或漢籍より迂疎

而弗切事實の語と見たるあり

六法

氣運韻作生動イレイウノキシヤウカ  
 骨法用筆ホネガキカラフデニホナラ

應物寫形カタチハモニナラフ  
 隨類傳彩イロドリハモニマカセテスル  
 經營シヨウフルキヲウケシ  
ウシラマツウズ謝赫

位置ツドリヲホネヲリテスル  
 傳摸移寫フルキヲウケシ  
ウシラマツウズ謝赫

六要

氣運兼力天才ノ上ニ逸格制俱老画ノ位トカキヤウ  
 變異合理カハリタル画ドリテ彩繪有澤彩ノ色ガウツキリ  
モ無理ハセヌ師學捨短師ノ長所ノミヲ

去來自然エノヤウニハミエヌ師學捨短師ノ長所ノミヲ

六長

廣上國求筆マリノナシニカクモ僻法求才テツナルモノハ  
ハ筆ヲ狂怪求理ソツタニカクモノハ

細巧求力チレイニカクモノハ筆ノソツヨミヲ

五端可學  
 而成氣運  
 必在生知



無墨求染 カスリ筆ニカクモ 平畫求長 ナシヨノ画モ

三病 宋郭若虛

三病皆原用筆、一曰板、板則腕弱筆疾

全虧取共、狀物平扁不能圓渾、二曰

刻、刻則運筆中疑、心手相戾、向画

之際妄生圭角、三曰結、結則欲行不

行、当散不教、似物滯礙不能流暢

十二忌 宋饒自然

布置拘密 回トリニアキ 遠近不分

山無氣脈 キツムキナシ 水無源流 ミナモトナシ

境無奔險 サトニ平地サ 路無出入 ミエカケレ

石只一面 側表裏 樹少四枝 木ノマダナシ

人物僵儻 セカバニル 樓閣錯雜 ムチヤニ入り

滄淡失宜 クマドリ程ヲ 點染無法 点タイ彩色

三品 夏文彦

神品 氣運生動出於天成、人莫窺其巧者

妙品 筆墨超絕、傳染得宜、意趣有餘者

能品 得身形似而不失規矩者

南北二宗

北宗 李思訓父子傳、而為宋之趙幹、趙伯

駒、伯駒、以至馬遠、夏圭

南宗 王摩詰始用渲淡、一變鉛研之

法、其傳為張璪、荆浩、關仝、

恕、董原、巨然、米氏父子、以至元之

有朱景真  
於三品之上  
更增逸品

大字、五  
○計、  
山ノ皴

披麻皴

小斧斨

雲頭

大斧斨

字尚

荷葉

解索

亂柴

鬼皮

馬牙

更有披麻而雜兩点、荷葉而

○釋名

翰、淡墨、重墨、旋旋而取之曰、

皴

淡以銳筆橫臥卷而取之曰、

渲

再以水墨三四而淋之曰、

刷

以水墨滾同澤之曰、

擗

以筆頭特下而直往而指之曰、

擗

以筆頭特下而注之曰、

畫

界引筆去謂之曰、畫施於樓

閣

亦施於松針

染

就緋素本色紫拂以漆水

漬

而成煙光、露筆墨踪跡而成雲縵

水痕

曰、

點  
點施於  
人物亦施  
於苔樹

分

瀑布用線素本色，但以焦墨

暈其傍曰分

襯

山凹樹隙微以淡墨潏落，潏力成

氣上下相接曰

畫

說文曰畫，象田畛畔也，秋

名曰畫，掛也，以彩色掛象物也

山尖曰

峰

平日曰頂

四曰巒

相連

曰

巖

有光曰

岫

峻壁曰

崖

崖間曰

曰

岩

若其山通曰

谷

不通曰

峪

峪中

有水曰

溪

山水曰

澗

山下有潭曰

瀨

曰

鳴

山水之名約畧如此

○無筆墨

古人云有筆有墨，筆墨二字，人多不曉畫意，其筆墨也。

無筆

但有輪廓，而無皴法也。

無墨

者，皴法而無輕重，白背雲氣。

明晦者。王思善曰：使筆不可及，為筆使，故曰石分三面，此語是筆。

亦是墨

○用筆

此畫者，用筆之大小，柳爪者，點染筆，左者，畫其竹，筆者，有同字，字之免，毫湖類者，羊毫，雪鶴柳。

先切筆

繁者フセオボヘ者先キリ筆下フセオボヘ慣ニ倚ニ毫尖者者有專取  
秃筆者者視ミ其ミ性ニ者者有相近  
未可執一

○用墨

李成惜墨如金。王洽潑墨滿成畫。夫  
學畫必先念惜墨。是際墨四字於六法三不  
思過半矣。

大凡舊墨祇宜畫舊紙。做舊畫以其  
銹銹尽銹歟火氣全無

○牛乳。杜詩太平寺泉眼白中香  
美勝牛乳。句アリ

○難有。杜詩清明二首。內胡童結

東還難有ノ句アリ

○不唾地。杜詩丈人山。自為青城客。  
不唾青城地。

○石硯。杜詩石硯。奉使三峽中。長嘯得石  
硯。句アリ。當時硯ニ石ニアラザレモアリ  
シト知ルベシ。然ラザレバ何ゾ殊更ニ石硯ト云  
シヤ

○鐵如意。杜詩奉送魏六丈佑少府之  
交廣。待中。錯揮鐵如意。莫避珊瑚  
枝。句アリ

○杜甫肺病。杜詩別唐十五誠因寄  
礼部侍郎賈。待中。為吾謝賈公。病肺

臥江池ノ句アリ

○浮瓜裂餅。杜荀信行遠惜水筒符。浮瓜供老病。裂餅常所愛ノ句アリ

○翠釜。杜荀慈人行。紫駝之舞出翠釜。注曰。紫駝背上有一高肉如封丘然。謂駝背也。

○竹實。杜荀朱鳳行。願分竹實及蠶蟻ノ句アリ。注。竹實竹之子。鳳凰之食非竹實不食。

○能諧。杜詩五言律。戲作能諧。能諧。題ト題セルアリ。其ノ語ニ家ノ頓ニ等アリ

○老畫師。杜荀鄭公樽散鬢如絲。酒後常稱老畫師ノ語アリ

○礼云。動則左史書之。言則右史書之。史記正義曰。左陽故記載。右陰故記載。言為高書。事為春秋。按春秋時置左右史。故云史記也

○附寶。黃帝之母名(史記注)

○塵愁。李君平玉洞逢暈秋符。塵愁死朱顏。久與江山隔ノ句アリ

○宋宣獻曰。校書如拂几上塵。旋拂旋生

○鄉愁。杜詩。若為看去亂鄉愁ノ語アリ

○老畫師。杜荀鄭公樽散鬢如絲。酒後常稱老畫師ノ語アリ

○礼云。動則左史書之。言則右史書之。史記正義曰。左陽故記載。右陰故記載。言為高書。事為春秋。按春秋時置左右史。故云史記也

○附寶。黃帝之母名(史記注)

○塵愁。李君平玉洞逢暈秋符。塵愁死朱顏。久與江山隔ノ句アリ

○宋宣獻曰。校書如拂几上塵。旋拂旋生

卜陶詩讀山海經其十、當銘、評、見

○山伏先達装束

篠懸・袴・胫巾・ハツ目草鞋・引敷  
(毛皮)檜笠・蓑・金剛杖・螺緒(螺  
付ノ紫太紐)錫杖・稜高珠敷・兜巾  
合子・護子・扇・護子・劍・蒲卷・柄  
小五銚・結加衣袋

# 护

護子扇 梵字一守

○渡邊華山 日黑福の同人

上田・鈴木・鷹見・渡辺の同人  
名は定まらぬ・心ひら・修賢・少  
提灯の火をたぐは夜立  
己丑十月十日 渡邊 登記 甲子

○半江の伝の江國典

天保 享和 弘化 天保 享和 弘化

○鴉鳩 齋榮里 京傳の伝を名はす

○安政 三子 刊在 甲賀 魚仙 輯 類

部 魚 護 あり

○紀元 三子 六子 手記 部 刊 社  
皇 催 日本 文化 史 展 覧 會 刊 部

一井風梧  
百十六年

正宗寺史義山 國俊兼光光忠  
長光久國信國 波平 包永字  
古名尸中 福國 一父字亦一  
不善之見之タリ

○横須賀郷 子爵阿部正友 翁  
にツクリ 青江 京極高修 翁

○曾我物語 真名本  
妙本寺常任 日我ト云ヤリ

○太平新編 (村上山六三主筆) 明  
子爵 伊東祐淳 翁

○治三十二年刊行  
一百七十三卷之長新者。續百五朝

仁心  
千石屋 永和十  
二年 辰辰 辰  
至百十三  
三十七 新集  
百七

略卷之三 延徳元年四月之條ニヨリ、

二條春盛死年百七十三、春盛不詳

何許人或云京師人、花園帝女保元

年生、少奉少尚之道、尤性密、來尊

氏義、論者曰見之又常謂義、為義

教好、今塔廟每有壞者、竭力修造

晩年絶穀一日、病死七日、復歎世以為

異人、至是死 (享保五年)

○天海 百三十三才、寛永二十年十月寂

○志賀瑞翁 百八十才 (享保中寂)

○小林勘助 正徳五年百三十六 其伯孫子也

○左治宗見 百七才

○岸本惟明 享保六年百二十字、後年及身少

○晚唐權審絕句曰

得即高歌失即休、多悲多恨謾悠悠、今  
朝有酒今朝醉、明日愁來明日愁、

○李山甫隋堤柳詩、逐波疎影向南斜、句  
アリ

○文學。謝朓文章清麗為齊王子隆文學

○免處所財四味。無事以當貴 早寢以當富

○安步以當車 勉食以當肉 (戰國策)

○五先勝 晚唐之詩人曹松、王希相

○一將功成萬骨枯 曹松 己亥歲下題

○劉象、柯崇、鄭希顏、五人

己下ノ句

○如蒼生何二條

(一)東晉穆帝之時、王濛嘗曰「深源(殷

浩之字)不起如蒼生何

(二)同者武帝之時、士大夫相謂曰「安石(謝

安之字)不出如蒼生何

○俳諧集。唐高宗之時劉訥言撰俳

諧集、上怒曰、以去經教人猶恐不化、巧

進俳諧辭說、豈捕首之義邪

○高宗嘗曰、自我作古可乎 (通鑑唐

紀十九初丁)

○唐高宗陶、西陽出鉞各符。行過



丘濬說

嶽棧出褒斜、出平川、以到家、  
世根、定、慈、今日、敬、馬、頭、初、見、米、  
○金陵、陳建曰、金陵、今南京、魏國、楚、  
成王時、以其地有王氣、埋金以鎮之、  
故名、漢改曰秣陵、吳曰建業、晉曰建康、  
六朝皆建都於此、隋為蔣州、唐為昇、  
州、宋為江寧府、元為集慶路、置江、  
南、街、道、街、失、其、于、此、故、又、謂、之、南、  
其、至、  
○神道碑、地理家以東南為神道、碑立其地、  
故曰、按地理家者、堪輿家也、謂相墓師、

用マテニ花  
過ギタルモ

○

漆山天童葛飾立石寓居庭中花打

- (一)牡丹 ○紫 ○淡紅
- (二)芍藥
- (三)立葵 (四)錢葵
- (五)忘水草 二種
- (六)夏菊 味分咲キツ
- (七)菖蒲 三種 土用ニ又蒼クモリ
- (八)寶篋多利斯
- (九)玉簪花 二種
- (十)紫陽花
- (土)山吹
- (土)芙蓉 白 淡紅

〇〇 〇〇 〇〇〇 〇〇〇〇

|     |           |
|-----|-----------|
| 二十五 | かたくり      |
| 二十六 | あけぼの 地榆   |
| 二十七 | 松本草 未花アリ  |
| 二十八 | 蜀葵 紅 黄    |
| 二十九 | 猩々袴       |
| 三十  | ぼけ        |
| 三十一 | 春蘭 ホクリ 二種 |
| 三十二 | 龍舌蘭       |
| 三十三 | 杜鵑花 四種    |
| 三十四 | 山吹 黄      |
| 三十五 | 杜若        |
| 三十六 | 姫あやめ      |

10 20

〇〇〇〇 〇〇〇〇

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 十三  | 紫菀                    |
| 十四  | 多岐丸 三種                |
| 十五  | 鈴蘭 土用ニ盛リ              |
| 十六  | 百合                    |
| 十七  | 桔梗                    |
| 十八  | 女郎花 盛リ                |
| 十九  | 菘袴                    |
| 二十  | 菘                     |
| 二十一 | 紫苑                    |
| 二十二 | 菖蒲 花くはてトモニクモカ長一丈ニモ延ビ花 |
| 二十三 | あやめ 六月中旬咲初メ九月迄        |
| 二十四 | 櫻草                    |

花

三十六

コスモス

三十七

撫子

三十八

常夏

三十九

萱草

二種

四十

水仙

四十一

雪の下紅 あろし

四十二

やたより 再雪 かつら草

植木を折上り

四十三

縞車前子

四十四

カシナ 盛

四十五

植木清水

四十六

春白花

四十七

じむくし 菊

西洋

四十八

あやめの 種類

四十九

ク

五十

サルヒヤ

五十一

草花美人草

五十二

アスパラス

五十三

蒲公英

五十四

西洋

五十五

月見草 未花アリ

五十六

薊

七

五十七

草吾

五十八

欠 欠 草吾子

五十九

并慶草

|       |     |       |     |     |     |     |     |     |     |    |     |
|-------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|
| 六十    | 六十一 | 六十二   | 六十三 | 六十四 | 六十五 | 六十六 | 六十七 | 六十八 | 六十九 | 七十 | 七十一 |
| くろくは草 | 薄   | 茄子    | 石葛  | 龍ノ鬚 | 茗荷  | 落   | 福寿草 | 梅   | 杜松  | 杉  |     |
|       |     | 草科山白り |     |     |     |     |     |     |     |    |     |

|     |     |     |     |     |     |     |     |    |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|
| 七十二 | 七十三 | 七十四 | 七十五 | 七十六 | 七十七 | 七十八 | 七十九 | 八十 | 八十一 | 八十二 | 八十三 |
| 五葉松 | 青木  | 白南天 | 桐   | 真柏  | 夕顔  | 银杏  | 鳳尾竹 | 石斛 | 日廻  | 姫石榴 | 庭梅  |
|     |     |     |     |     |     |     |     |    | 又小岩 |     |     |

すいごう  
 蔓草  
 覆盆子  
 母子草  
 薊  
 石蒜

八十四 小の収採

以上九十九種  
 昭和十五年六月八日現存

- 凌霄花
- 里百合
- 紫草
- 龍膽
- 木犀
- 椿
- 辛夷
- 葉雞頭
- 了了草
- 車百合
- かきわ
- 紅梅
- 野梅

漆山天皇藏書畫工不明、繪入本

- 伊勢物語 廣長 土佐光信 歿
- 曾我物語 正保三年三月刊
- 伊勢物語抄海 明暦元年
- 保元平治物語 寛永三年
- 發心集 〇四年 (住吉具慶ニ似タリ)
- 方丈記之抄 〇〇
- 宇治拾遺物語 萬治二年
- 堀川院艶書合 寛文元年
- 扶桑隱逸傳 〇四年
- 曾我物語 〇十一年 (師宣ニ似タリ)

吉野拾遺

貞享四年

(吉田半兵衛歟)

撰集抄

〃〃

(蒔繪師源三郎歟)

古今著聞集

元禄三年

遊仙窟鈔

〃〃

(明画ノ模写歟)

義經記

〃十年

(吉田半兵衛歟)

和朝今昔物語

享保五年

十割抄

〃六年

岐蘇路記

(三徳三年) 〃〃

吾妻路之記

〃(卷首ニ古人名画ト断ツテ四季ノ富士山ノ画アルモ画工ノ名不明也)

古今英草紙

寛延二年九月(竹原春潮齋歟)

奇談繁野話

明和三年(〃)

夜話莊治

天明三年(此文同種ノ挿繪本数多アリ)

涼みくさ

寛政六年

(綾足自筆歟)

筑紫記行

文化三年九月

名古屋ノ東南歟

此、他無記名ノ挿繪本数多アリ是其一種

類古ノ者ヲ出テズ、又

源平盛衰記・太平記・南庵存本同

記等ノ枕本ハ無記名ナレバ本林善清ト

断シテ善清、又

負彦子・元禄ノ文、和漢朗詠集・海道

記、方丈記トトノ懐中小本ニテ師宣ト断

ジテ宜キモノ数多アリ

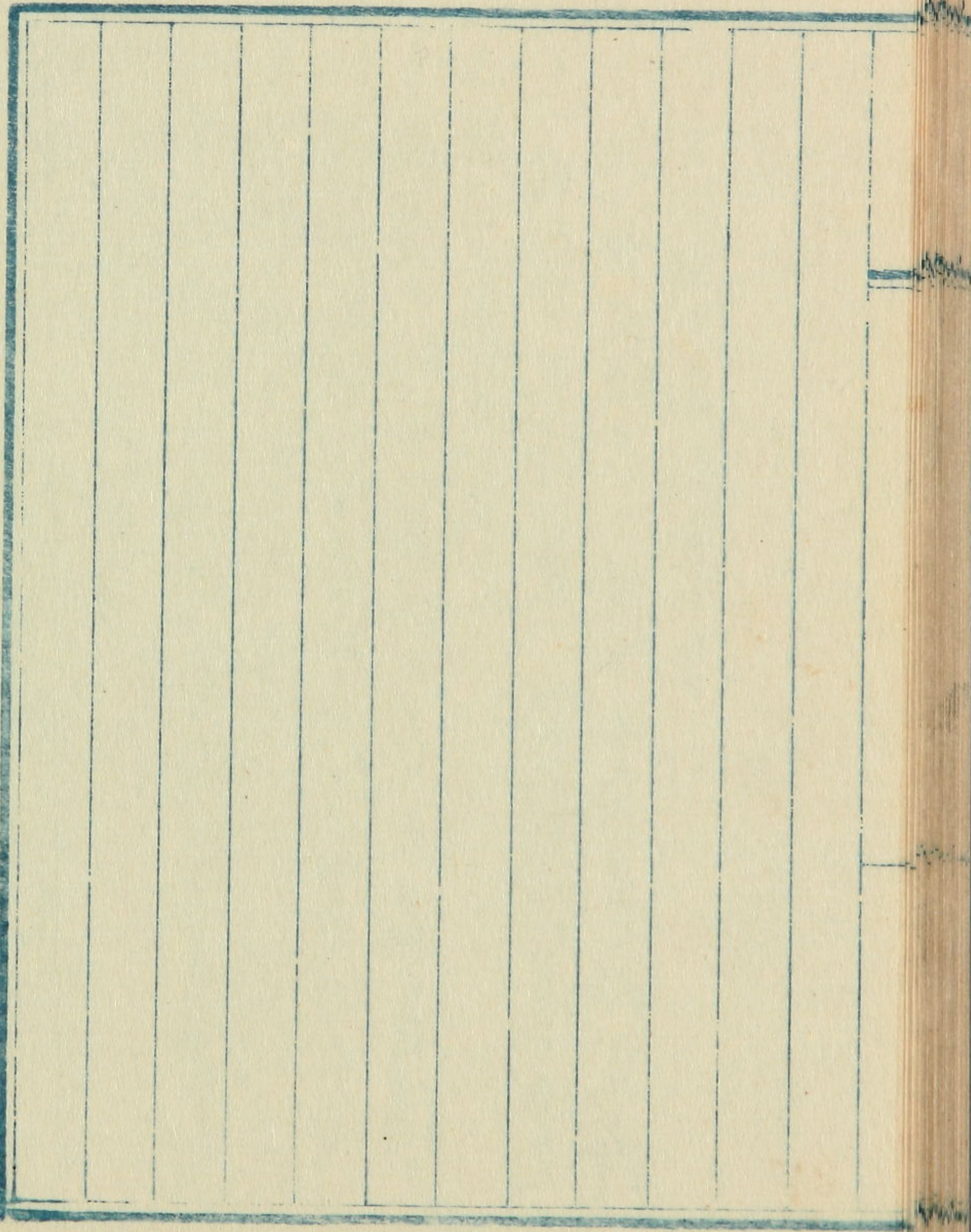
天章謂、  
元、蒙古曰  
フ、

○圖書。明史、仁宗賜塞義銀圖書

注曰、古今印史、陸文量曰、古人於圖書  
書以務皆印記、某人圖書、今人遂以其  
印呼為圖書、余州史糾賜銀圖  
書以示褒美

○明末宋好佛、自號大慶法王、又習韃靼  
語、自名忽必烈、又習回、語、自名好吉教  
爛、又習番僧語、自名額古班丹

○匈奴、諸名稱。廿二史畧、鬼方、注曰、鬼方  
ハ北胡也、歷代名稱各異、夏、獯鬻、曰、  
殷、鬼方、曰、周、玁狁、曰、秦漢、匈奴、曰、  
唐、突厥、曰、宋、契丹、曰、明、韃靼、曰、



○肅慎。東北夷。息慎也。今，靺鞨古，肅慎也。

○羲和。東方國名。杜詩西園曝日之注曰：羲和東方國名。日所由過之地。每日出二

國人為御。推於太虛。唐堯取以名官。○雞舌香。漢官儀：桓帝時侍中刁存年

老口臭。帝出雞舌香共言之。後尚書郎人言雞舌香始於此。

○青苗。唐大曆二年三月。稅青苗地田。不王安石而已也。

○干將莫邪。博物志曰：風胡子因吳請干將。砍冶子作干將。陽龍文。莫邪。

陰漫理。此二劍。吳王使干將作。莫邪

干將。妻也。此文二因。ツラ見ん。干將

莫邪。ハ劍工。名ノ如リ。亦劍其ノモノ

名。テモアル。○神仙七人。尔朱先生。朱真人。桃稚。

神和子。居突無為。海蟾子。劉昭遠。榮

隱先生。大井和許少人。漢杜光庭。○改

震。部談詞錄。○雷之圖。王充論衡曰：雷之

之狀。如連鼓。又圖一人。若力士。謂

之雷。公使左手引連鼓。右手推之。春

秋震夷。伯之。謂辟力。破之。是也。



霹靂處俗字也

○續博物志曰、前輩云、於字必字无草書

○又云、不可为巨、如是為爾、而已為耳、之字为諸、西域之合之音、切字之原也

○李泌在衡山、事明瓚禪師、瓚云欲與者、先將筆硯碎却、天童謂無筆硯、作明心論邪、此

○王僧曰、有書契以來、便應有筆、世傳蒙恬制、非也、蒙恬曰、蒙恬以枯木为管、以鹿毛为柱、羊毛为被、所謂毫、非今三竹兔也

○元和十一年、元稹使蜀、官妓薛陶造十色彩箋、以寄元稹、於紙上寫字、如粉、蜀中紙、純雜色流沙、紙彩霞、金粉、靑鳳紙、在、皆廣、餘十色彩箋、紙尚在

○木瓜味酢、善療轉筋

○夔州地方無井、以竹引山泉、播接山腹間、有數百丈者、杜祐、蜀人、送瓜、注

○海國兵談の巻付へて、我日の

未又此の如き歌、本此作すもの、

を因文の中、法乃卷せり

載せり、五至年のほ

竹竿接歌

○寛文七年初春刊面ゆめすん屋用  
柄の吉原菴の描畫、確の師宣  
の筆なり

○日本の打ちの山樵、似たる記長。西  
陽雜俎續集卷第一、支諾寧篇景  
首の載せしる。支諾寧國の夷族金器が  
遠祖旁毫兄弟の事

○柳宗元答杜温夫書ニ其方ノ助字  
ヲ用ルヲ見ルニ法度ニ中ラズ、人ヲ善書  
ニ此ヲ告グ所謂手數耶哉夫ノ五字  
ハ疑ノ辭ナリ、慎思之ハ一益ナラズトイヘリ  
辭ナリ、慎思之ハ一益ナラズトイヘリ

○董魯直曰、以我觀書則急々得益、以  
書博我則釋矣、而茫然

○宋洪邁曰、議論ノ文、字ヲ作テ八事  
實ヲ考引テ、差忒ズシテ、乃チ信ヲ傳テ  
可シ、東坡ガニ臨、精ハ事實相違セリ  
後生可勉也ト

○西陽雜俎續集卷三ニ載スル、越州老媪丹  
ノ表兄韓確ガ夢ニ魚ト為ルコト、而月物  
泣多、應ノ鯉魚、出處ナルベシ

○漢宣帝之時、魏相上書申曰、救亂強  
器、御之義、兵者、敬加於己、不  
得已而起者、謂之戍兵、兵應若勝、爭恨

小故、不忍憤怒者、謂之忿兵。兵忿者、  
利人土地、負資者、謂之貪兵。兵貪者、  
破恃國家之大、誇民人言、象欲見威、  
於敵者、謂之驕兵。兵驕者、威云々  
○仁明天皇、承和元年九月、島木史、具  
ナル者、機弩ヲ制ス、左右旋轉、四面發ス  
ベシ、神ノ如シ  
○文德天皇、白雲天、安三年四月、近江相坂、関ヲ  
復シ、新大石、新華ノ二関ヲ置ク  
○べおをべいといふ事。紫花物語初卷ノ  
卷上、思もまらぬ程ノ上、も常ノ者  
なひ、思もまらぬ程ノ上、も常ノ者  
如何なる

べい、事ノ也、思一、立ち難かりけり、野、其前  
いしあり

○杜詩七言律中、杜員外先重示  
詩、因作此字、寄上部、部受判官ト題セ  
ルアリ、コシハ先ニ杜員外が部受判官ト  
ハタテ、部受が返付シタルトテ、杜員  
外ノ入レマシキモノトテ、ソレヲ部受ノ  
詩ノミヲ載セテ、部受ノ詩ガナシ、  
何ノ事、肩ゾヤ、  
員外示詩者、感部判官而作トナシ、  
アハ、コレハ題ヲ讀ミ、誤ツテ居ル、即チ  
杜員外先重示詩、マテハヨイガ、因テ作此

ルハキ

寄上 鄧受判官 一ト讀ニシノハ悪シ、  
因作此寄上 鄧受ト問ラ置  
イテアノヲ、上ノ字ト鄧字ヲ附着  
サシテアノヲトテ寄上ト杜撰中ニ入レタ  
ムテアラフ、

○白居易五言律ニ於テ毎句同句ヲ用ケタル  
連作多シ例ハバ 和春深二十首 何處難  
忘酒七首 不如來飲酒字アリ、一格トスフ  
ベシ

又 夜送孟司功一首ハ樂天ノ五言律中  
最モ格調ヲ於テ勝レタリ、但彼ノ詩ヲ於  
テハ變調ナリ

七言律中樂天一流、特色ヲ見ルベキモノ  
數々篇ヲ撮レシ 香奩峰下ト辰中ノ五  
加三句・日高睡足、二首 ○南湖早春  
錢塘湖春行 西湖晚歸 湖上望  
江樓夕望 江樓晚望 長洲苑  
ニテ 行次夏口 是處有大夫 歌音陽樓  
ハ格調ヲ以テ優ル  
七律中 格調・風邪 共ニ失ハサシモノニハ  
對月憶元九 杭州春望ノ二首ナリ  
樂天ハ絶句ニアリテハ五言ヨリ七言ニ長  
ゼリ、七言絶ニテハ 玉照 君 長洲苑  
梨園弟子等ニテ中興唐祚 妙意ヲ

代表ヤリ

又叙情ニ於テ、**遊子**の**樓**、**明月**、**同春**の十

一**碑**、**憶元九**、**十五**

叙景ニ於テハ、**楊柳**、**枝**、**祠**、**依**、**柳**、**一**

**紅**、**散**、**江**、**橋**、**二**、**柳**、**春**、**風**、**子**

多情相帯グルモノ、**望**、**江**、**州**、**建**、**昌**、**江**、

更ニ下リテ、**宿**、**六**、**元**、**苦**、**一**、**流**、**一**、**叙**、**多**、**為**、

ニ於テハ、**舊**、**房**、**村**、**夜**、**多**、**工**、**今**、**一**、

府、**西**、**也**、**贈**、**江**、**家**、**浦**、**中**、**夜**、**泊**、**子**、

ニテ、**五**、**危**、**ニ**、**テ**、**閨**、**怨**、**詞**、**離**、**臨**、**元**、**ヲ**、**推**、

スベシ

○滅印心頭火猶冷。白居易苦熱題恒  
寂師禪室詩中、但能心靜即身涼  
ノ語あり

○夢食與。白待自徠五首中、可矣  
食夢與、不知若是苦ノ句アリ(二、九)

○左臂懸破篋。空海山所裝良書中三  
語○左臂懸弊篋。白樂天觀刈麥詩  
中句、空海入唐延曆三十二年六月時年

三十一歲、樂天其時貞元二十年ニ當リテ三  
十三歲、**破**、**篋**、**弊**、**篋**、**異**、**アリ**

ノ、其先後如何

○書經堯典文思安、ヲ蔡沈注シテ白ク

文、文、文章也、思、意思也、文、著見、而思、  
深遠也、安、世所勉、強也、言、其德、  
性之美、皆出於自然而非勉強、所謂、  
性之者也、下、然、性、モノナリ、吾人、  
強、イテ、勉、ムル、勉、メテ、能、ハサル、ナリ、

○漢和硯銘

王、海、黃帝所有

結鄰、唐李衛公

紫石潭、徐玄之

傳、元、憲、夫人、王氏、宋初、勲、臣

王、起、之、女、元、憲、者、古、硯、甚、奇、王、氏、曰、物

諸、女、相、授、予、

重、雲、硯、唐、莊、宗

玉、帶、硯、文、信、國、不、有、後、歸、謝、臯、羽

王、堂、硯、文、與、可、不、有、李、坡、為、銘

天、石、硯、蘇、軾

瑶、池、硯、李、西、涯、銘

三、災、硯、李、倉、書、家、藏

鴛、鴦、硯、中、山、王、徐、魏、國、家、藏、一、對

上、漢

北、齊、廟、堂、硯

知、恩、院、什

見、魏、碑、坊

松、風、硯  
松、蔭、硯  
幽、池、硯  
殘、月、硯

竹、仙、堂、什

八稜研 千利休茶

曲地研 先珠茶

明霞研 初会斗可茶

玉帶研 古井着地茶

春石研 大雅茶

宮川研 八仙堂

書魚研 宮筠園茶

高田研 高茶

紅梅研 柴氏(栗山)茶

津水研 世傳齋茶

細波水月研 相不愚山茶

美土葉研

○鏡山仇討類似の茶。賀矢一氏の人名  
辞書に「はつ烈女。石見の人。本  
名松田さつ、濱田美の侍婢。同本道  
に仕ふ、道同寮。落右津野に凌辱せ  
らる。少して自刃す。初津野を刺  
して自害す。高保ヤリの人」と

○輿櫓。日本のキヤリなり

○小松島。茶人葉師院洋製の茶。岩を

信長に献ず。小松島といふ。葉師院の婿の

人。紹臨門人なり

○高忠齋。古筆名葉集に序文をま  
して曰く、安政五年三月温故茶の書

○**憲**の**雨**相**石**の**硯**より**翰**を**採**と**紙**  
する**事**なりなりつゝ**兔**の**毛**なりなり  
る**事**なりなりつゝ**か**は**し**か**す**する**事**  
なりなりなりなり

○**参議**以上を**公卿**といふ、**中将**より以下を  
**殿上人**といふ(梅村載草)

○**菅原**為長は天子の侍讀たるによりて  
**國師**とさる、今は**沙門**のみ**國師**号ある  
なりなりなりなり

○**花下**とよみは**連歌**者の**新**によ  
ことなり、夫を**勅許**のやうに云ひるはた  
はとも**禁中**よりほさうなり、事あり、

宗祇・宗師・兼載なども参考せず

○**元改**上人の**延**行りより**奥津**と云  
延間の**萬**沢と云ふ所の家あり、**吉**西果  
の家の**豆**を以て**符歌**を作れり、**符**を  
なり

○**呂純陽**詩

**獨上高峰望**  
**黑雲**散後月還都  
**荒**宇**宙**人**無**教  
**箴**箇**男**是**是**文

○**字**貫**四十卷** 二二、二六、二五  
**瑞州新昌王錫侯編次**



乾隆乙未新鐫

吉安府 金蘭堂藏板

見返

序。宣旨乾隆三十九年長至月瑞州新昌

王錫侯韓伯氏謹識

目次提要二回シ

○諺の曰く白日よ人を誅ずれば害を生ず  
昏夜も鬼を後水に怖るる

○秋成春雨物語空のこころの悠々平城天皇のこころ  
を詠して「一日大虚もやかく風枝を鳴らす」  
空よを好く言ふは空海も有り公もして念珠おしす  
り呪文高きものも唱ふるも即ち地獄に墮ちたり  
怪し鬼人をもなかりてかけたり 捕て檻にあり

雅波地はははめさせ云こトアリ

○謡曲、小塩・井筒・杜若・求塚・高砂のい  
つれと歌道を説き、前の三篇、伊勢物語、後  
の二篇、古今集・大和物語より材を取らり  
その外空蟬・夕鳥・夢の上・玉茗・浮舟の  
如き厚氏物も然りとす

○柿本栗本と有心無心の歌

水陸所目よ曰く、六條内府有房 神徳云、後  
多羽渡市時、柿本栗本とを置るる、柿本は  
世のうらみの歌、星を有心となく、栗本は  
狂歌、是を世心とらふ、有心は後京極  
殿、経慈結知る、以下其所ある、是の歌  
人なり、世心なり、先親心宗行の春覚

法師等して、あまの御魂の御魂ありて、  
世に世に何れも、大なる御魂あり、  
司火をて、殊に面白き日、昔々の方より、  
意然なる

いさゝか、わなをの移れ  
と、しり、移を後して、世の方へ送らるる

行脚

心なりし人のたまを、  
ゆきよ、  
と、  
かきき、

○寂蓮 新長々の撰、  
以前あり、建仁三年七月廿日、寂を  
○定家 明月記、貞永三年三月廿日、  
二物、  
行、  
物、  
く、  
り、  
○定家、  
る、  
朗、  
○

野田

大和物語。拾遺集。後撰集。

土佐日記

○二條家の三代

後撰の千載。定家の新勅撰。為家  
の統後撰勅撰

○武陵桃源之漁夫之姓名

姓黃、名道真。桃花源記注アリ

○陶詩柴木之序。曰。總角聞道白首無成

ト。同感

○奇文欣賞。詔陶詩移居其一。出ツ

○郎田信玄の死。天正元年三月菅沼定盈

士率伊勢の人、芳休、尺八をき、ハ、多、み、三、左

衛門の鳥銃ようたるなり

鄭之弦高之喬

随先生

